思辨論理の可能性に就いて（承前）

山本清幸

六

精神の自覺的對自性にとつて自然は不可缺的契機であるから、理念の自己との圓環的媒介に於ては自然の積極的意義は精神的自然として考察されねばならない。自然は本來的にはその自性々によつて理念に對する外面性に自己の限定を有つ。從つてこの外面性では概念規定は假象的にではあるが個別的な獨立存在を許容し、概念の自由は內面に後退して、自然存在は偶然的なものゝ外的必然性として現はれる。換言すればこゝでは必然性と偶然性が支配してゐて、眞の必然性卽ち理念の自由な必然性は失はれる。（Ency. §247.）併し自然の自由なき必然性が否定的に自由の根柢であることは、論理の根柢が矛盾的にその否定原理にあつたのと等しく、精神の自由も亦自然必然性に竢つものとして、シェリングの「殘存物」は寧ろ始原的原理となるべきことを示す。それ故自然が外面性として理念の自己疎外態であるといふことも、例へば自我から非我へといふフィヒテ的な Überfliegen であることはできないであらう。理念の第一推論で媒辭であつた自然の意味は積極的に論理と精神の綜合といふ意味を有つべきことを前に述べたが、その中に意味せられる自然の根源性、卽ち自然が生產的に始原的たることは第二推論の前提である自然に示される。それ故自然の生產性を生產する側面からでなく、生產された形からのみ捉へるなら、論理とその自覺である精神の中間に介入されるより外はなくなり、媒辭たる自然は推論の單なる通過點とならう。そこにはシェリング的憧憬は起り得ない。

自然の無性とその生産的憧憬の根柢たることは精神の前提でなければならない。總べての精神の作用は自然のこの自己矛盾の上に成立つてゐると言へる。闇黒と光明とはその二重性を織成す。„Sie hüllt den Menschen in Dumpfheit ein und sportet ihn ewig zum Liche. Sie macht ihn abhängig zum Erde, träge und schwer, und schüttelt ihn immer wieder auf.“ (Goethe, Die Natur.)

自然のかゝる矛盾的二重性はシェリングの憧憬に於て、ロゴス的生産の根柢として把握されてゐる。けれども「世代」に於ける神的必然の Trias が示してゐた様に、自然の生産性を論理の肯定面に於てのみ捉へることは、自然の二重性の矛盾を摘開するに尚徹底的であるとは言へない。シェリングの憧憬の根基はどこまでも神の内なるものであつた。無は有の根柢であつた。即ちそこから自然の無がかゝる相對無に對する否定原理として、無自ら矛盾的に無に面するものであることは明とならない。併し神性的な絶對自由の無は、神的必然性の三和音に代るに無の Trias を可能ならしめる。無に於ける矛盾的對立と統一の三和音は、最早憧憬的に形成肯定的ではなく、形成の根基を形成に對する積極的否定に求め自然の矛盾的眞實態を初めて明にするのである。即ち自然の否定的無性は、自己内還歸する神の自己性、即ち神の怒に對應して、自己への無限な復歸に於てのみ神的統一を可能ならしめる。從つてこの絶對統一を對自的に實現する精神は、創造に志向する憧憬的な神的必然の Trias を裏附けとするのではなく、無の Trias に裏附けられ、神からの創造に對する積極的な否定を自然の無限な自己性に於て主張するものでなければならない。それ故精神の自覚は理念の自由な必然性から理性の名に於てなされるのではなく、かゝる神的必然と共にそれに對する恣意的自由、精神的自然を始原とするものでなければならない。かくて無の Trias を裏附けとする精神は、先づ第一に理性的であり而も現實的な客觀精神として人倫態を樞軸とする如きものではあり得ないであらう。何故なら精神が對自的にその自然性を克服する客觀精神の合目的的展開は、一面自然の無限な自己性への回歸に纏綿せられて、精神の有限性の永劫な非完結を示しながら、他面精神の對自的矛盾の統一を實現すべき絶對精神の眞實態を却つて人

倫態に轉移せしめ、絶對精神に於て論理と自然の絶對統一たる神的對像の表象に對するに飽くまで外なるものとして對する個別精神の原本的自然が見失はれ、個別たらぬ特殊に精神の本地を置くものであるからである、このことは個別性に屬する神子の意義を、特殊性の人倫的範例に轉換せしめることであり、神の對像誕生を神からの創造に歸することゝ相應じて、精神の矛盾的統一を豫定せられた本質と世界との宥和に仕替える結果を招くのである。精神の個別性を無の Tiles から闡明するためには、かゝる客觀精神の限界を判然たらしめなければならない。

先にも觸れた如く、ヘーゲルは宗教哲學講義に於て特殊性を子の國に該當せしめ、普遍的本質を前提とする子たる特殊的現象として、自然と有限精神への分裂とその統一を說いてゐる。有限精神とは自然と相互依存的關柄にある精神であつて、「その自然性によつて有限精神は自己內に於ける否定性の極として自己を惡として獨立せしめる」自性々を免れない。(Enc. § 568.) 從つて有限精神は、精神の本質である自由によつて、自己に無制約的始原をもつ自覺が、その自然性に於てあるまゝに自然の外面性を止揚せんとする精神であるとも言ふことができる。併し精神の自然性否定の動性には極めて自然的に精神の悟性的自同性が潛入するのである。ヘーゲルは「精神は自己の個別的直接性の否定といふ無限な苦痛を耐え忍ぶことができる。卽ちこの否定性のうちに肯定的に自己を保持し、そして對自的に自己同一的であることができる。この可能性は精神の抽象的な、自己內の對自的普遍性である」と言ふ。(Enc. § 383.) 有限精神が自己否定の苦痛なく自然性に止住し得ない對自性によつて、反對に自己の個別的直接性の否定に自己の存立を保ち、この否定に自己との同一性を維持して、精神の悟性的自同性を立てようとするのは、却つて個別的直接性といふ自然の超越的自性々を無力にし、このことによつて精神自らの內容をも貧困ならしめるものと言はねばならない。かゝる精神の自己否定による自己肯定は、一見具體的であるかの如く見えながら、精神の對自性を空しくし、精神の本質を單に直接性から媒介性に轉換するものとして、悟性論理的自同性と呼ぶより外はない。この精神の悟性主義は、それが主觀精神的に實踐理性的自由によつて眞に實踐理性自身を意志する理性の自同性に於ける場合で

あつても、又は客觀精神的に存在となつた自由によつて現實的形に自己を見出す人倫的理性の自同性に於ける場合も、最早根本的に異なるとは言へないと思はれる。自己否定の苦痛は、個別的直接性が止揚さるべき惡として決定濟であり、精神の本質が自然と論理の媒概念から論理の側にずれてゐるのであつて、この本質から原理的に決定される自己の否定は苦痛に値するとは言へない。かゝる悟性主義が經驗すべき眞の苦痛は、それが自然性を否定することによつて到達すべき自己同一性が、實踐理性にあつても又客觀精神に於ても、共に到達不可能な無限目標であつて、この非完結的自己同一性に止住しようとする悟性主義とを精神に本來的な自然的自性々に外ならないといふことである。シェリングの神的憤懣に於てもさうであつた樣に、神からの創造に卽してのみ形を捉へ、すべての形式的動性を啓示に於て意義附けることは、悟性主義に意味せられる單一な自同性を免れないであらう。從つてシェリングが所期した positive Philosophie がイデアリズムから生立つとは考へられないのである。精神が自然性から由來する陷穽に陷入つて自然否定的自同性といふ悟性主義に立たざるを得ないのは、精神が極めて偏局せるイデアリズム的精神主義に立脚せしめられるからであつて、このことは自然の否定による論理への親近を示しつゝも、むしろ精神自らの媒概念性を放棄することによつて、論理と自然との矛盾的な具體的統一の論理を平板な悟性論理に轉化せしめ、自然と共に具體的論理をも見失ふことを意味する。悟性論理は飽くまで積極的なものを組織する積極的論理とはならないで、單に積極的なものを證明する消極的論理でしかない。ヘーゲルに於ても事情は同じであつて、悟性に對する理性の Vernünftigkeit を强調した彼の思辨論理も結局は强固な悟性主義の論理であり、積極的方法たり得ないで消極的方法に止つたことは彼の精神主義の自然否定的自同性から當然結果すべきものであつた。シェリングが自己の哲學の積極性を唱道した動機もそれに對するものであつたのである。自然性否定の苦痛のうちに自己肯定を見出し、自己同一的たり得るとせられるヘーゲルの精神は、啓示せられたものでも又啓示するものでもなく、正に啓示そのものであると言へる。從つて精神が自然否定的に精神たることを主張する限り導出された絕對性は被導出性を自覺しないし、又被導出性を自覺

しないが故にその絶對性は導出されたものなのである。而してかゝる對自性なき導出された絶對性こそは自然の本質に屬するものであつた。それに加ふるに、自然の自性的闇黑を意味する完全な被導出性が却つて逆に自然の無限な生産性をなすものに外ならなかつた。この自然の本質的な矛盾が今や精神的自然として、有限精神に於て見出されるのである。卽ち有限精神は自己の個別的直接性なる自然を克服することによつて、自己を普遍に保ち、被導出的有限性を絶對化し、無限化するのである。精神は自己否定の苦痛のうちに精神たることを自覺するのであるが、かく有限精神が自己の精神性を主張することにその自然性が最も判然と現れるのである。それ故 Moralität や Sittlichkeit は未だ嚴密には精神の名に値しないであらう。精神の對自性は精神そのものに撞著せず、單にその自然的契機の一つである自己の個別的直接性に當面するに過ぎないからである。而も自らは個別性の眞實態を消極化し之を克服することによつて普遍性に止住する。有限精神は精神の本質的對自性に到達しない自然的精神なのである。この意味に於てヘーゲルの精神哲學も自然的精神の哲學と言へるのである。而してその因由はそれが自然を消極化し、精神の精神性をイデアリズム的に形から、論理から導出し、精神を神からの啓示に卽してのみ規定しようとする啓示主義に立脚したことにある。自然の生産性はその自性的闇黑に存した。然らば有限精神の自性的自然性は精神の生産性を意味するであらうか。正にさうである。精神が眞に媒概念的に思辨論理の矛盾性に對應する自己矛盾的對立と統一を展開し得るのは、一見精神本來の對自的動性を消滅せしめるかの如くに思はれる有限精神の自己否定的自足なる自然性の自性性に缺つのである。精神をして精神たらしめるのは、自己を惡として否定克服する善なる精神でなくして、善なる精神の自性性、その有限的自然に撞著する絶對精神である。それ故之を裏面から言ふと精神が絶對精神であるがためには、有限精神はどこまでも善なる精神として、自己に對するに到らざる自性的精神でなければならないことゝなる。かゝる對自性に到らざる有限精神の導出された絶對性とは自由に外ならない。自由は原始的自然としては個別的直接性として恣意でなければならない。それは先にも述べた如く論理化された自然である理性的自由に比して、論理の原本性に

對應する自性的自然性を意味する。けれども理性の自由は神的精神の自由ならぬ有限的精神の自由として、その自證する絶對性に於て却つて精神の動性を固化せしめ、自ら精神ならぬ自然たることを暴露するが故に、恣意が意味する原本的自然性は理性的自由によつてその直接性を止揚せられつゝも、その固有の意義は却つて強化徹底せられると見てよい。從つて有限精神の自同的絶對化を招く理性哲學には、それが主觀主義的な場合に於ても又客觀主義的な場合に於ても、自由の理念が自然ならぬ精神の固有な理念として、自然否定的に捉へられ、而も正にこのことに於て精神の媒概念性を喪失し、その有限性を不動たらしめるのである。それ故自由よりも恣意を原本的とする自然性も具體的には、恣意と自由との間の動性に於ける精神の自己否定と肯定のすべてを有限性に包攝せしめ、この有限性に對自的に衝當する絶對精神の否定的積極性として、新たな精神的自然の生産性を示現しなければならない。この線に滑ふて新たな展開を見なければならない。精神の本質は飽くまで自由にある。とすれば自由とは如何なるものであるか。自由を本質とする精神は絶對精神としては如何なる形態を取るのであるか。それには精神の顚倒的假態である客觀精神を止揚超克しなければ明とならない。客觀精神との關連のために、有限精神の自然性に就いて尙二三の點に觸れて置き度い。

實踐理性の自由にはその自律性に於て客觀から自由となる主觀性が附纏ふ。カントは理性を人間が他の事物や感性的なる限りの自己から自己を區別する能力であると言ふ。悟性は自己活動的である點では理性と同等であるが、悟性が自發的に働くのは假令感性の如くに感受的なる限りに於てゞはないとしても、感性的表象を法則の下に包攝し、之を意識にまで統一するに役立つ概念のみを産出するといふ意味に於て、尙感性と不可分な關係に立たざるを得ない。之に對して理性は純粹な自發性である。(Kant, Grundlegung z. M. d. S. Dritter Abschnitt, 13.) 實踐理性は自己同一性によつてのみ自由なものであり、善意志はたゞ意志自らを希求するものとしてのみ善であつた。かゝる理性の同一性が悟性論理的同一性であることは否定できない。この自己同一的閉鎖性によつて目的の王國は支へられる。從

つて義務、自由、人格などの概念は外から内への閉鎖性保持のためのものであつて、それとは逆な自己擴張的概念ではない。純粋な自由を保持する人格は個別的に目的の王國の成員でありながら、普遍立法的として元首でもあつて、個別精神はこゝに閉鎖的に自同的な普遍意志の媒介により特殊的範例に自己の原型を見出すものとなる。それ故實踐理性的自由は理念の自己還歸に可能根據を有ち、有限精神を媒介とする限り當然主觀的な目的論とならねばならない。個別精神の本質に結附く根本悪がこの理念への還歸を阻害し、目的論を主觀的反省に止めるとすれば、有限精神は有限性に立戻つてゐる。有限精神の自覺はかくて自然の積極性を承認し、自らの有限性の否定超克の方途を自己の叡智性に求め、無限に非完結的な目的論も叡智的には完結的であることによつて、その意圖とは反對に有限性止揚の機を失ひ、現實的な絶對精神への道を塞ぐのである。併しこの實踐理性の閉鎖的な自己同一性は、否定的な意味に於てゞはあるが、客觀精神展開への足掛りをなす。客觀精神の自由は理性の自同性を存在として顯示するものであるが故に、人倫態はこの自同性を開放的に示さなければならない。從つて有限精神の非完結性は人倫態に於ける自覺の有限性を掩ひ、之を無限性にまで強ひるために客觀的目的論たらざるを得ない。有限精神が自然性の否定によつて絶對精神を準備する唯一の道が目的論である。それ故ヘーゲル的思辨の論理をして目的論的となし、彼の客觀的開放的な啓示主義を汎神論的たらしめ、眞の啓示に當面せざる理性の悟性的自己同一性を結果せしめたものは、實に客觀精神であると言ふことができる。けれどもヘーゲル自ら指摘した如く、存在となつた自由とは自然となつた自由に外ならない。Sittlc とは自覺的自由が自然となつたものとせられる。(Ethcy. § 513.) この客觀精神的自然は世界として、精神の對自性にとつて新たな起點となる第二の自然に外ならない。

自由を閉鎖的自己同一性に於て保有した人格は、具體的には人倫的な實體である。人格の當爲的自由は意志を意志することに叡智的存在性を有したのであるが、世界性に於ける實體である精神は自己同一的理性の當爲が絶對的であつたのと全く同等に、自己の自由を現實的存在となす。このことは言葉を換へるなら、精神が單なる個別性や普遍

性、又はそれらから導き出されたに過ぎない抽象的特殊性で考へられるのでなく、現實的特殊性として民族的精神でなければならないといふことである。「自己を自由であると知る實體は、その中で絶對的當爲が正に同程度に有であるものとして、民族の精神である現實性である。」(ibid. S. 514.) けれども非常に重要なことは、かく自然となつた精神といふものはその實、自由を存在に定着せしめることによつて、自然性を否定超克し自ら精神なることを顯示し、自然となるのとは反對に精神が精神となることに外ならないといふことである。それ故かゝる自然となる自由は精神の矛盾的對自性によつて、客觀精神の自己同一性の超克を不可能とする。存在する形となつた自由は自然であると言つても、生産された自然に過ぎず生産の根基である自然性を自ら喪失する。即ち客觀的實體的な民族精神の本質は理念に對する合目的性に求められ、精神の對自性が最も際立つ個別精神とは對蹠的な方向に定められるより外はない。ヘーゲルに於ても實體的な客觀精神は、絶對精神に於ても自己媒介を完了せる後の最終的段階として維持せられてゐる。即ち聖靈の國である教會と世界との和解は理念的な國家に於て達成されるものであつた。彼は聖靈の普遍的現實性に對する具現に就いて、宗教性と世界性との和解が人倫態に於て實現されると說き、主體の人倫に對する服從が之をよくするといふ。(Hegel, Religionsphilosophie, Das Reich des Geistes, G. 16, 344.) 聖靈の國はもと個別性の段階であり、聖靈に於ける人倫優勝は個別精神を特殊化する恐れが多分にある。ヘーゲルの精神哲學の全體的な重點は、存在となつた自己同一的理性の自由にあり、客觀精神的目的論が絶對精神を掩ふ結果、ヘーゲル的自覺體系に於て絶對精神が固有な原理を見失ひ勝ちなことは否定できないと思ふ。精神的自覺の個別性は特殊性なる客觀精神の內面的展示に過ぎない。然るに個別性は自由喪失的な目的論の無精神性が崩壞すると共に始まるものである。特殊的精神には自由の無制約性を意圖する以上目的論は免れることができない。それは自然性否定的に精神の自己同一的權能を意味するものである故、之に對してはシェリング的な惡なる自由は尙消極的であらう。そして惡なる自由の自然性が積極性を有し來つたとしても、カントの根本惡が現實にさうであつた如く、依然目的論成立の餘地を殘存せしめ

る。尤もシェリングの自然は、矛盾的に神の實存への憧憬を裏附ける根源性を有するから、惡なる自由は精神が無制約者に對し反抗的に包攝される絶對精神の段階に浸透して、罪にまで具體化され得る。併しかゝる根源の惡は理性的自由に對する感性的恣意とは當然異なるものでなければならない。感性的恣意なる惡は、カントの根本惡の場合の如く、理念の叡智的完結性にとつて必須的條件であるとさへ見られる。それ故眞に根源的な惡は寧ろ自由そのものにあるのであり、精神が自己同一的に精神たることを是認するその自由に歸せられる。この意味に於て精神自らも惡的である。精神の自覺的對自性とは、自らの自然性を單に恣意として、自由を以て之に對するのではなく、精神自らを本質的に自然的として自ら之に對することである。精神自らの根源惡に對することである。精神の對自性によつて論理と自然とが對峙し、精神がその媒辭をなすといふのは、精神の自覺そのものに於ては、全體としての精神自身が全體としての精神に對することであり、精神が飽くまで矛盾的なることを意味しなければならない。この樣な對自性は有限精神なる特殊性には期待することができない。精神の對自性とは精神が精神に對することでなければならないからである。絶對精神はこの對自性によつてのみ自覺を完結し、精神の本質なる自由を實現することができる。而して絶對精神は特殊性ならぬ個別性に於てある精神である。即ち自覺的精神なのである

（未完）